

第30号 20円

昭和48年3月25日

内容

——千人会特集——

ア社会経済史の諸問題	1
千人会共同セミナー	2
7回大セミナー懇談会	4
共同セミナー懇談会	6
私の大生活	6
2回大生活セミナー	7
海外物案内	8
海行物案内	9
業務通信	10
利用状況	10

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

【所在地】

東京都八王子市下柚木
電話 0426-76-8511~3

【東京事務所】

東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(241)3961
振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

私の専門はモンゴルが中心ですが、モンゴルの歴史について書かれた資料は一番古くさかのぼっても、一三世紀の半ばころで、近い清朝あたりでも非常に少ない資料しかありません。そのために私は社会学、経済学、人類学あるいは言語学的方法を使わざるを得なかったのです。

また、一九二〇年代の終りごろ歴史の新しい潮流はケンブリッジ大学から主としておこったいわゆる社会経済史の流れでした。私はそのころ、その影響を最もうけたアメリカやカナダの大学におり、とくにカナダの大学院では指導教授が後にケンブリッジ大学の教授になったフエイという人でその影響を強く受けたように思います。

ヨーロッパ、とくにイギリスにいたる間はイギリスの歴史をできるだけ広く読んでおりました。ところが中世史の中に一三世紀の半ばごろ、モンゴルの一部族であるタタール人——ヨーロッパではタルタルと呼んでおります——がポーランド諸侯とドイツ諸侯の連合軍を壊滅させた後、ついにバルト海の沿岸に現われたために漁業がでさなくなり、イギリスにはかなりひどい不景気がきたという記事をふと読んで、いったい、どんなことでタルタル人がヨーロッパの方、バルト海まで出て、それからアドリア海などの南の方に行ったのか、調べましたところ、ヨーロッパの中世の史料には非常にたく

さんモンゴル関係の史料があるわけです。

フビライ汗の中国に対する占領政策は、要するにモンゴル人に対して反乱行為とかモンゴル人の利害に重大な支障を与えなければ、被征服民族は大いに自由だったわけ、宋の時代に引き続き、元朝は経済的に繁栄した社会だったわけです。しかし、私自身、ケンブリッジ学派に影響されて、やはりミクロな考証的なことだけでは満足できない気持があつて、遊牧民の歴史を、歴史全体としてどう理解するべきであるかというよう



アジア社会経済史の諸問題

京都大学名誉教授 岩村 忍

ことも並行的に考えざるを得なかったわけ

日本人にとって遊牧民ほど縁の遠い世界はありません。ですから遊牧民の実地調査によつて、その生活や社会構造をしっかりとつかんでおかなければ、読み方に間違いをするのではないか。例えば遊牧民というものはある自然的条件を必要とし、砂漠や南の湿潤地帯では遊牧できません。史料に、水草を追うて遷徙、すなわち移動すると書いてあるが、実は遊牧民はそう

勝手には歩くものではないことが実地調査の結果ではっきりした

です。

さて、歴史というものは過去の研究であるときれていますが、それでは過去とは何かというところ、結局時間の経過であると考えます。現在までの歴史のどこをとつてもまた現代そのものも歴史研究の対象にできるかと言いますと、私は研究である以上、はっきり研究領域というものを限定するべきだと思ふ。歴史的時間というものを歴史家が認識するのは変化によるものですから、時間というものを歴史家はある変化とある変化との間のプロセスであると考えます。

また、現在というのは、長さではなく、始終動いている点です。歴史の最終点を現在まで持つてくることはできないことになり

ます。それから、過去は文献のあるまゝが歴史であつて、文献以前は歴史ではない。ただし、考古学や人類学の研究対象となりますのは、これは歴史と性格が違うとみざるを得ないわけ

です。歴史というものは、人間のある価値観にたつて歴史の因果関係を追求するものであり、それなくしては史料の利用に対する論理的根拠はないと私は考えております。

歴史家は考古学の資料から想像して、こうだったということはすべきでないで、研究の領域を限定して、歴史とはあくまで文献のある時代に限らなければ、精密な研究はできません。

そういう理由から、私は「現代史」否定論者であります。

それから、歴史というものが完全に客観的ではあり得ないという点がございます。言いかえれば歴史の目的は過去を再現、あるいは再建することではないということ。実際のな立場から申しあげますと、例えば、チンギス汗の伝記の材料というのは、「元朝秘史」ひとつよりないので。それにもかかわらず、現在に至るまでチンギス汗の伝記というのは非常に多く書かれています。一定の史料しかないのに、同じ歴史が繰り返されるという事は、これはやはり歴史をみる人、書く人の価値観によつて、解釈が違ふから、そのたびに解釈しては書かれるのだということになります。

近代になると史料は急速に増えるわけですが、もし史料そのものが歴史であるならば、歴史を書く必要はなく、史料を全部編さんして年代順に並べておくだけでいいことになります。しかし、それが歴史でないことは明らかだと思ひます。私は以上のように歴史というものを考えているわけ

【第七回大学教員懇談会】
発題講演の概要 文責編集者

共に生きる 多摩の丘にひびく 123人を迎える

開館七周年の成果をどのよう
に社会は評価してくださるだろ
うか。この歴史の証言台に立た
れたのが、七周年記念を期して
お誘いした千人会員の募集に
応じてお申込みくださった新会員
一二三人の方々である。貴重な
財宝を捧げてくださいましたそ
の協力こそ、セミナー・ハウス
が利用者と共に生きる mission
運命でありたい。

新たにお迎えした会員の大部
分は利用者の先生方であるが、
先生方がご自分の親友をご推挙
くださったり、ご自分の奥様を
ご指名くださったり、財界人が
おられたかと思うと、新卒の若
い社会人もおられる。

現在の会員数は新会員も加え
て次のとおりである。

現在会員 大学人 五八六
七四六 社会人 一六〇人

千人会

◆新しく会員となられた方々

一三三名(昭和48年3月末現在)

現在会員(大学人 五八六
七四六) 社会人 一六〇人

第19回報告(申込順)

創価大学助教授 福島正久殿

青山学院大学教授 三上次男殿

島田療育園園長 小林提樹殿

東京大学農学部 近藤薫樹殿

白梅学園講師 海老沢克之殿

東京工業大学卒業生(在米)

青山学院大学助教授 徳久球雄殿

日本YMCA同盟研究所 宮部 直殿

成蹊大学名誉教授 伊藤隆吉殿

東京大学教授 井上 孝殿

鶴見大学教授 勝木保次殿

東京都立工科短期大学学長 川田雄一殿

東京都立八王子工業高等学校 教諭 梶 国男殿

日本大学教授 馬場明男殿

東京学芸大学助教授 斉藤耕二殿

横浜国立大学助教授 山科高康殿

慶応義塾大学教授 山本 登殿

横浜国立大学教授 伊倉退蔵殿

成蹊大学助教授

岡田巳代次殿
東京都立立川短期大学教授
大竹 誠殿

日本大学教授 瀬在良男殿

東京大学助教授 一丸節夫殿

東京都立大学助教授 小島守生殿

立教大学教授 三戸 公殿

中央大学教授 江副敏生殿

東京都立大学名誉教授 高峯一愚殿

東京大学教授 護 雅夫殿

立教大学助教授 松田正一殿

早稲田大学教授 白澤富一郎殿

日本原子力発電(株)社長

東京大学助教授 竹中 肇殿

明治学院大学助教授 松島 恵殿

明治学院大学教授 森井 眞殿

日本基督教会東京告白教会 牧師 渡辺信夫殿

聖心女子大学助教授 岡 宏子殿

東京経済大学助教授 荒川幾男殿

東洋大学教授 園田義道殿

北海道大学助教授 山崎真秀殿

東京大学助教授 佐藤誠三郎殿

青山学院大学助教授 羽田三郎殿

東京都立大学助教授 金子ハルオ殿

東京大学助教授 見田宗介殿

専修大学理事・経営学部長 小田切美文殿

横浜市立大学助教授 今井清一殿

東京都立大学助教授 古屋野正伍殿

電気通信大学助教授

東京大学助教授 伊藤 満殿

明治学院大学助教授 西 勝殿

不動産鑑定士 河村 龍殿

明治学院大学法学部長 作問忠雄殿

東京大学助教授 濱川祥枝殿

一橋大学助教授 山澤逸平殿

一橋大学名誉教授 高橋泰蔵殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

大学セミナー・ハウス職員 増澤利幸殿

東京工業大学教授 市川惇信殿

共立女子短期大学講師 内田市五郎殿

早稲田大学教授 松田正一殿

日本原子力発電(株)社長

東京大学助教授 竹中 肇殿

明治学院大学助教授 松島 恵殿

明治学院大学教授 森井 眞殿

日本基督教会東京告白教会 牧師 渡辺信夫殿

聖心女子大学助教授 岡 宏子殿

東京経済大学助教授 荒川幾男殿

東洋大学教授 園田義道殿

北海道大学助教授 山崎真秀殿

東京大学助教授 佐藤誠三郎殿

青山学院大学助教授 羽田三郎殿

東京都立大学助教授 金子ハルオ殿

東京大学助教授 見田宗介殿

専修大学理事・経営学部長 小田切美文殿

横浜市立大学助教授 今井清一殿

東京都立大学助教授 古屋野正伍殿

電気通信大学助教授

東京大学助教授 伊藤 満殿

明治学院大学助教授 西 勝殿

不動産鑑定士 河村 龍殿

明治学院大学法学部長 作問忠雄殿

東京大学助教授 濱川祥枝殿

一橋大学助教授 山澤逸平殿

一橋大学名誉教授 高橋泰蔵殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

安達 健殿
日本大学教授 大内英吾殿

東京学芸大学助教授 東川清一殿

国際基督教大学学務副学長 三宅 彰殿

東京都立大学助教授 清水 誠殿

日本大学教授 武藤俊之助殿

目白学園女子短期大学助教授 片山清一殿

創価大学法学部長 伊藤 満殿

明治学院大学助教授 西 勝殿

不動産鑑定士 河村 龍殿

明治学院大学法学部長 作問忠雄殿

東京大学助教授 濱川祥枝殿

一橋大学助教授 山澤逸平殿

一橋大学名誉教授 高橋泰蔵殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

毎日新聞論説副主幹 林 卓男殿

東京大学助教授 衛藤藩吉殿

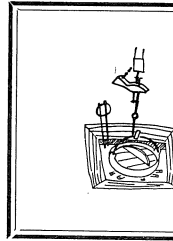


花見とだんごさくらの下で

Mitsein

善意の共鳴

千人会員新たに



昭和四十七年度は千人会会計から一三〇万円経常費に寄付してもらい、開館七周年記念品代に充当していただき、具体的には、「記念論集」一、〇〇〇冊とグラフ三、〇〇〇部相当額であるが、おかげで共に七周年を祝っていただき、セミナー・ハウスらしい記念品であるといって喜ばれた。

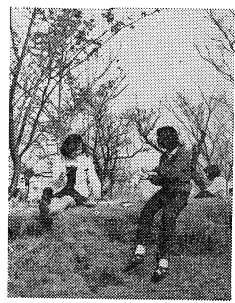
千人会員の募集についての反響は驚くほど大きく、過去七年の間にこの丘にのぼられた人々、セミナー・ハウスの活動を實際に認められた賛助者が、千人会員にご加入くださったのである。文字どおり一、〇〇〇人の会になることもそう遠くないことと思われる。

- C 東京大学教授 乾 崇夫殿
- C 日本硝子(株)理事
- C 上智大学教授 村上 眞殿
- B 安斉 伸殿
- C 青山学院大学助教授 小林 望殿
- C 大学セミナー・ハウス職員 豊島広司殿
- C 一橋大学教授 齊藤忠利殿
- A 東京大学教授 奥村敏恵殿
- C 柴田恭二氏夫人 柴田愛子殿
- B 明治大学総長 小牧正道殿
- C 東京教育大学助教授 末永国明殿
- C 上智大学教授 永澤越郎殿
- B ミキモト(株)相談役 富士勝久殿
- C 日本大学教授 大村政男殿
- B 日本平和研究懇談会 浮田久子殿
- C 中央大学教授 横井芳弘殿
- A 早稲田大学助教授 高山 旭殿
- C 東京芸術大学助教授 角倉一朗殿
- C 城西大学講師 原田行男殿
- C 東京大学教授 黒田成俊殿
- C 千早子どもの家保育園 栗原照子殿
- C 東京大学教授 内田祥哉殿
- A 専修大学学長 相馬勝夫殿
- B 日本大学教授 栃原敏房殿
- C 津田塾大学教授 上田明子殿
- C 麗沢大学助教授 谷口 茂殿
- C お茶の水女子大学教授 茅野良男殿
- C 日本大学教授 原 治殿
- C 東京都立大学教授 伊藤文人殿
- C 早稲田大学講師 椿 弘次殿
- C 東京水産大学助教授 磯 直道殿
- B 美ささ織(株)社長 樫崎彰男殿
- C 国際商事法研究所 常務理事 牛丸一成殿
- B 日本大学教授 鈴木正紀殿
- B 三友建設(株)代表取締役 外池孝雄殿
- B 東京理科大学教授 小原清成殿
- C 明治大学教授 高木亀一殿
- C 千葉大学教授 須賀恭一殿
- B 東京都立工業高等専門学校 助教授 矢野 正殿
- C 早稲田大学教授 望月昭一殿
- C 健康管理コンサルタント 岡 惺治殿
- A 日本大学講師 薄衣佐吉殿
- A 野村証券(株)取締役社長 北裏喜一郎殿
- C 文教研委員長 福田隆義殿
- C (財)日本茶院専務理事 安達義明殿
- C 立正大学助教授 中村孝之殿

◆会費ありがとうございます
昭和47年12月〜昭和48年3月

- 室俊司、齊川仁、新井益太郎、大地羊三、江上不二夫、伯東株式会社、奥繁光、飯野利夫、坂本清、安藤良雄、笠原正成、尾形憲、小穴純、池田温、田中外次、田中昭

- 二、西巻正郎、関口実、T・I、慶伊富長、高山利勝、茂木誠陸、伊東好次郎、山田潤二、半谷高久、市川孝正、佐島秀夫、松田稔子、福原満洲雄、茅伊登子、山田圭一、中富光国、太田敬三、西村秀夫、塚本利明、伊藤学、岩尾裕純、内藤正、清水啓三郎、天野成光、江野沢一嘉、三宅義夫、久松潜一、小林提樹、深沢実、桑原哲郎、宮川松男、杉山好、平木典子、中鉢正美、石田龍次郎、近藤薫樹、大原恭子、飯田宗一郎、中



うららかな春の陽を浴びて

- 尾信之、高橋恒郎、水野悦子、村次郎、栢野晴夫、光延明洋、横山宏、佐々木彰、小山弘志、赤松秀雄、武田昌輔、武藤義夫、師岡孝次、今村浩明、升本喜兵衛、関嘉彦、一番ヶ瀬康子、鈴木博、岩下秀男、長島正、山口喬、柳沢富雄、原増司、鐘ヶ江信光、村瀬興雄、大川章哉、森山俊雄、高橋源次、小谷正雄、飯泉信、吉田裕、石塚司農夫、正田卓治、磯村英一、川本茂雄、根岸愛子、小川昌子、松原元一、祖父江寛、林喜男、海老沢克之、吉田修三、良知力、松原与三松、中島力、鈴木昭、谷資信、田内幸一、松元三郎、吉田公保、川喜田愛郎、中山知雄、加倉井茂樹、佐藤直子、上谷琢之、田上穂治、岡田純一、斎藤勇、久世寛信、新保清子、飯尾右一、磯野修、吉川春寿、有賀喜左衛門、山崎俊雄、福島杉夫、稲毛卓遺族、春日井薫、吉阪隆正、薄見音彦、昌谷春海、平岡勇、島田依史子、力石誠之介、京極純一、井原恵治、近藤圭一、増地昭男、T・W、中岡二郎、本間仁、松島千代野、三浦忠夫、堀米庸三、正田建次郎、藤永鉄雄、中川章、東洋、谷口修、藤井領子、寿門秀夫、宮部直、新沢雄一、堀内睦子、桐国男、中村妙子、笹山忠夫、最上武雄、五唐勝、一松信、井村君江、遠藤平治、増澤利幸、荒川孝子、石原忠男、村松林太郎、小泉明、村井実、杉山逸男、板橋並治、山口俊夫、内山正熊、珍由一太、榎原繁雄、遠藤卓夫、早坂泰次郎、小林望、安藤英治、植村甲午郎、齊藤幸一郎、松尾弘、永野賢、大西清、大田末穂、守屋美賀雄、村田全、栗原俊記、土居健郎、山澤逸平、河村龍、高橋泰蔵、永井道雄、浮田久子、土井恵美子、三井為友、護雅夫、瀬在良男、北村宗彬、岡村総吾、福西基、相馬勝夫、高瀬文志郎、手塚喬介、加藤六美、山田良之助、安斉伸、平沢薫、西勝、茅野良男、村上泰治、向防隆、樋口美智恵、望月清司、矢野正、三上次男、朝永振一郎、丸山真男、小山五郎、松田正一、伊藤隆吉。

(以上二一四名)

第52回

主題 中国思想と日本
期日 昭和47年12月11~13日

(全体講義)

中国人の考え方と歴史

慶応義塾大学教授 村松 暎氏

(セクシオン演習)

B 日本古代における中国律令の継受
池田 温氏

東京大学助教授

C 武田泰淳における中国文学
高田 淳氏

東京大学助教授

D 中国文明の自立性
戸川芳郎氏

——その思想の原型において

東京大学助教授

E 中国の宗教と日本
福井文雅氏

——道教の場合——

早稲田大学助教授

F 日中交流二千年史の再検討
藤家礼之助氏

東海大学助教授

(ゲスト講演)

荻生徂徠における日本と中国

京都大学名誉教授 吉川幸次郎氏

(参加学生)

五一名(うち女子二名)

早大(九)、東大(五)、お茶の水

女大(四)、横浜国大(三)、東北大

(三)、明学大(三)、東洋大(三)、

中大(二)、聖心女大(二)、明大

(二)、一橋大、東教大、東外大、

埼玉大、日大、専修大、法大、大

正大、慶大、東海大、武蔵野女大、

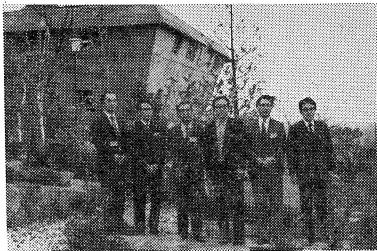
津田塾大、東女大、成蹊大、武蔵

大各一名(二五大学)

最近のジャーナリズム等に見られる浮き足だった中国ブームや、日本人総懺悔的な論調に対して、日本と中国の関係を歴史、思想の次元で見直そうとしたものである。村松先生が中国の歴史上の人物を例にとつてその考え方を、また、吉川先生は日本人が如何にして中国思想を受容し、それが今日的に見て、どのような問題があるかを講演された。作家武田泰淳を通じて誠実な日本人の中国との関わりあいを探るなど特色のある演習も多く、参加学生から「今までの中国思想に対する自分の価値観が変わった」という感想も聞かれ、企画、運営の任に当たられた福井、戸川両先生の熱意に応え、充実した内容で、終始できたようである。

第53回

主題 夏目漱石と森鷗外
期日 昭和48年1月19日21日



指導された先生方。左から竹盛、小堀、江藤、小島、平川、越智の各氏

(全体講義)

漱石と鷗外をめぐって
明治大学教授 小島信夫氏

夏目漱石「人・時代・文学」
東京工業大学助教授

江藤 淳氏

(セクシオン演習)

A 漱石の初期作品
越智治雄氏

東京大学助教授

B 夏目漱石「人・時代・文学」
東京工業大学助教授

江藤 淳氏

C 日露戦争と森鷗外
竹盛天雄氏

早稲田大学助教授

D 鷗外における科学と文学
平川祐弘氏

東京大学助教授

E 自然主義文学と森鷗外
小堀桂一郎氏

東京大学助教授

(参加学生)

一〇八名(うち女子五八名)

早大(一三)、お茶の水女大

(九)、東学大(九)、東女大(八)、

津田塾大(六)、東大(五)、慶大

(五)、一橋大(四)、東外大(三)、

東工大(三)、東教大(三)、横浜国

大(三)、明学大(三)、日女大(三)、

宇都宮大(二)、埼玉大(二)、山梨

大(二)、都留文化大(二)、白百合女

大(二)、上智大(二)、立大(二)、

目白学園短大(二)、電通大、茨城

大、千葉大、都立大、横浜市大、

聖心女大、明大、共立女大、東洋

大、ICU、日大、法大、実践女

大、二松学舎、共立女短大各一名。

(三五大学、二短大)

この企画は、共同セミナー委員

であり、第四八回「日本人の再発

見」の運営委員長としても活躍さ

れた小堀先生が再び担当された。

全体講義の小島先生は、研究者

としてだけでなく、作家の視点も

交えて漱石と鷗外について述べら

れ、江藤先生は、漱石の恋愛につ

いて先生の新しい説を話された。

今回の応募状況を見てみるとB

セクション、江藤先生への申込み

が非常に多く、二セクションを編

成し、さらに全体講義をお願いす

ることとなり、学生の興味、関心

の所在を感じさせられた。また、

卒論テーマを決定するために参加

したという学生も多く、先生方の

間では、早くも「それなら、再度、

同じ主題でセミナーを開こうでは

ないか」という気構えも生まれる、

両者に強い意気込みの感じられる

セミナーであった。

第54回

主題 水と文明
期日 昭和48年2月23~25日

水と文明

東京大学助教授 高橋 裕氏

モコン川の開発と文明
拓殖大学助教授 安藝皎一氏

(セクシオン演習)

A メコン川の開発と文明
拓殖大学助教授 安藝皎一氏

B これからの日本の水資源計画
の考え方
経済企画庁
総合開発局水資源課長
中沢式仁氏

C 地域文化と水
東京農業大学助教授
佐藤俊朗氏

D 海外取材をとおして見た「水
と文明」
NHK報道局社会部記者
玉井賢二氏

(ゲスト講演)

東京大学助教授 小堀 巖氏

(参加学生)

五一名(うち女子八名)

東教大(八)、日大(八)、東大

(六)、早大(六)、津田塾大(四)、

法大(三)、立大(二)、茨城大、埼

玉大、東学大、東工大、岐阜卓

大、慶大、工学院大、芝工大、上

智大、東京農大、東洋大、日女

大、立正大、昭和女子大短大部各

一名(二〇大学、一短大)

近年、各国で天然資源の枯渇が

問題になっているが、「水」も重要

な問題の一つである。まず日本と

外国の「水」をとおした比較文明

論を展開し、われわれが無意識に

使っている水が如何に大きな影響

を及ぼしているかを考察する。

この企画は、共同セミナー委員

であり、第四八回「日本人の再発

見」の運営委員長としても活躍さ

れた小堀先生が再び担当された。

全体講義の高橋先生は、研究者

としてだけでなく、作家の視点も

交えて水と文明について述べら

れ、中沢先生は、日本の水資源計

画の考え方について講演された。

を人類に与えたかを明らかにするとともに「水」の重要性を再考せよと訴えた。

全体講義で高橋先生は、水資源問題が生まれてきた歴史的背景について、また安藝先生は、今までに関係したメコン川、黄河の治水と地域文明の関係や日本の河川治水について講演された。最後のまとめでは、経済企画庁で実際に日本の水資源問題に携わっている中沢先生に現在の水行政に対する質問や批判が集中していた。

第55回

主題 平和研究の新展開

討論とシミュレーション

究の課題と方法

期日 昭和48年3月9~11日

〈全体講義〉

平和研究の新展開

上智大学教授 武者小路公秀氏

〈セクショ、演習〉

A 政治的安定と発展のパターン

——平和研究における計量分析適用の試み——

独協大学助教授 白鳥 令氏

B 緊張緩和の心理的メカニズム

独協大学講師 白井久和氏

C アジアの平和のための経済援助と文化交流

東京大学助教授 平野健一郎氏

D 平和のための教育

——PAULO FREIRE の

Pedagogy of the Oppressed

を手掛りとして——
日本平和研究懇談会

浮田久子氏

〈ゲスト講演〉

一橋大学教授 細谷千博氏

〈セクショ、アシスタント〉

一橋大博士課程 佐々木伸夫氏

〔参加学生〕

七四名(うち女子一六名)

慶大(一)、早大(一〇)、上智

大(八)、独協大(七)、一橋大(六)、

津田塾大(六)、東外大(四)、IC

U(三)、お茶の水女大(二)、電通

大(二)、東工大(二)、横浜市大

学大、横浜国大、埼玉大明学大、

成蹊大、国学院大、青学大、立大、

学習院大各一名(二三大学)

全 体 講 義

平和研究の新展開

上智大学教授 武者小路公秀

平和研究の歴史的背景を見てみ

ますと一九五〇年代には「核戦争

は避ける」という危機意識があり

ましたが、一九六〇年代後半に入

ると米ソ間の核バランスを崩さな

いでいようとしている間に、ベト

ナム戦争という核レベルでない戦

争の問題が出てきました。このよ

うな情勢をふまえた上で平和研究

の理論史を見てみると大きく次の

三つに分けることができます。

I II A、アメリカにおいて、ゲ

ーム理論等を用いて、核戦争を避

けるためには強い核軍力を持た

大学共同 第52回

なければならぬ、という矛盾を内包した核戦略論の体系化。 I II B、同じゲームの理論を用いながら、戦争を引き起こさせないためには段階的に核軍力を減らすという核戦略論への批判的研究。

II、このような抽象論への批判として、戦争というものを一つの社会現象として把握、歴史の中で出てきている全ての戦争から資料を集めて、そのメカニズムを究明し、戦争をなくすためにはいかにすればよいかという社会学、政治学的な研究。

III、「戦争は人間の心から起こる」というユネスコの考え方と関連しますが、戦争が起こり、エスカレートしていく時の人間の心理状態を考察し、その上で、緊張が高まらないような心理状態を如何にして創り出せるかという、心理的な現象を重視する考え方。 さて、アジアにおける平和研究の問題点を見てみますと、アジアでの平和研究は日本とインドで行

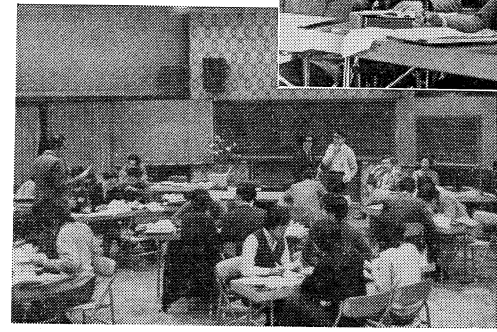
なわれているに過ぎない。だが日本の平和研究はアメリカの平和研究の受売りに過ぎないといわれており、自己批判されねばならない。インドの平和研究は、ガンジーの非暴力の思想をもとに、自国の紛争の問題をよく研究しており、これは他の国々では見られない非常に特色のある研究と言えます。

しかし、インドと日本を除きますとアジアの他の国々では、平和研究は次の二つの意味で嫌われております。一つは、他のアジアの国々の学生達は、「国をつくるために勉強しているんだ」という体制内の気持がありますから、平和研究は反体制的な性格を持っているから受容できない。次は、これと正反対に、「平和研究は現状を維持するための研究だから容認できない」という考え方で

す。 このように、日本とインドを例外としてアジアにおいて平和研究に対する関心は非常に薄いと言えます。現在は、インドの傾向と日本で発展させている欧米的な平和研究とうまく組み合わせて新しいアジアにおける平和研究というも



武者小路先生の全体講義を聴講される上代たの先生



シミュレーション風景

のを、今後つくっていくかなければならない段階にあると考えております。 今までは、アジアの問題を皆で考えようという機運がなかったのですが、このベトナム戦争の終結を機会にして、アジアに平和研究を考えるための条件がようやく出てきたと言えます。言いかえますと、今、平和研究というものをアジアで推進していかないと、

いろいろな問題が出てきてもそれに対処するだけの社会科学の知識が欠如するといふ非常に困った状態が出てくるのではないかと私は思います。

(全体講義の概要 文責編集者)

第七回大学教員懇談会

主題 共通利用講義について
期日 昭和48年2月17～18日

◆プログラム

〈発題講演〉

I ライフ・サイエンス

——分子生物学から見た生命観
慶応義塾大学教授 渡辺 格氏

II アジア社会経済史の諸問題
京都大学名誉教授 岩村 忍氏

〈全体討議〉
〈参加者〉 三三名
東教大(四)、東大(三)、農工大(二)、東工大(二)、慶大(二)、成蹊大(二)、中大(二)、東経大(二)、理科大(二)、武工大(二)、東京医科歯科大、電通大、京大、大妻女子大、ICU、上智大、専修大、東洋大、明大各一名(一九大学)

本年度第二回目の大学教員懇談会は、さる七月の第六回懇談会ならびに九月の運営協議会(ニューズNo.29)の討論の結果をふまえて前掲の主題によって開催された。

大学設置基準の改正を機会に、各大学が共用できる講義・演習——共通利用講義——が、セミナー・ハウスを舞台に新しいカリキュラムとして開発できるのであるかろうか、かつ、それは単位として認定される程度の内容をもつものでありたい、という問題設定のなかで、二日間の会議が進められた。

第一日は、共通利用講義として適切な内容、領域と考えられる問題について、二つのモデル講義を、渡辺格、岩村忍両先生にお願いし、これらを素材に、共通利用講義の内容面の検討が行なわれた。第二日は、これを具体化する方法的、技術的な問題点に話題がおよび、全体討議における数多くの貴重な発言は、司会の目黒・原両世話人によって別記のとおりまとめられた。

今回は会期が入試の時期と重なったためか、出席者はやや減少したが、懇談会初参加の先生方が多かったため、このような試みに対して共通の理解を深め、広く生産的な意見を求めたいという世話人会の呼びかけに即応することができるとともに、実行段階に移る有力な手がかりが得られた。

◆全体討議総括
① 共通利用講義については「開かれた大学」の一環として単位を与えるという形で実施していこうという線に意見がほぼまとまった。

② 実施に際しては、数校が集まって一つのテーマを決め、集中利用講義というようなものを開催する形になると思われる。その場合

一、二校がホスト役を引き受けて単位を与えるために、その講師に対して臨時講師の依頼をするなどの事務を担当していただくという方向が考えられる。

③ 認定単位数は、さしあたって二単位程度、二泊三日の授業が二回(約三〇時間)になると思われる。実施時期については数校が集まり、大学側の事情によってその時期を決める。

④ 実施する場合に、「単位を与えよう」という以外の大学にも案内状を出して、オプザーバーとして学生や先生方に積極的に参加を働きかける。

⑤ 講義の形式は、原則的にはシステムティックな体系をとり、それに、大学セミナー・ハウスの共同セミナーで取り入れられている「分団討議」「全体討議」などを組み合わせて行なう。

⑥ 将来構想としては、諸外国の講師を招請する計画も考えられる。

⑦ 以上の事柄を実施する場合、一つのコミッティをどう組織するかという問題があるが、これは世話人会のほうで、どういう形式にしたらよいかを議論して、後日、報告する。

共同セミナーと私の大学生活——卒業に際して——



社会発展の原動力として
加藤 博

革への重要なフアクターであり、同時に私の興味を誘った。
ここに参加する学生は、大学を越え学部を越え、それら様々な専攻と環境にある学生達が一つの場に集い、それぞれの自己をぶつけあい、あらゆる領域の議論を展開していくのである。そこでは一つの大学においてだけではなしえない幅広い議論も繰り広げられ、またそこには広い視野と寛大な心をもった一人の人間が形成される可能性が潜んでいるのである。こうして得られた多大な知識経験は多くの学生の心の底深く沈殿し、

大学セミナー・ハウスを初めて私が訪れたのは、大学のゼミ合宿のことであった。「大学共同セミナー」という、すばらしいプログラムがあることを知ったのもこの時で、爾後、数回にわたり私と共同セミナーとのつながりが生じていったのである。
著名な教授達による講演やセミナー、教授と学生の交流および夜明けまでも続く討論会等が自己変

やがては社会発展の原動力として作用するであろう。そして私も、間近に卒業を控え、ここでの多くの貴重な経験を何らかの形で社会に還元すべく努力する所存である。
(早稲田大学政経学部四年)

共同生活が一つの方向を示唆
——第55回共同セミナーに——
参加して——
野本まりの

初日に武者小路先生が平和研究なるものの概略と問題提起を示され、私はその時点で平和研究の取り組み方の困難さを理解できた。
セクションでは、先生やメンバーたちが活発な意見を出しあい、それぞれ全く知らない者同士が何を考え、何を問題としているかを知らずして、自分の平和研究への取組み方の甘さを十分に認識することができた。立場のちがった者同士が自分の経験をともに主張しあつたことは、実感がかもつていて、説得力があり、こうした経験は個人にとつて有益であつたと思う。

セミナーでのめぐまれた環境の中で、先生方と共に生活できたことは、私のこれから一つの方向性を示してくれました。共同セミナーでの生活は若さに満ち、討論で爆発し、非常にエネルギーがあつた。

(独協大学外国語学部四年)

万国博基金とJAFSAの協力

第二回国際学生セミナー

主題 ■ アジアの平和と開発

——新しい国際環境のなかで——

期日 ■ 昭和47年12月14、17日

〈全体講義とセクション演習〉

A アジアの紛争と平和

一橋大学教授 細谷千博氏

B アジアの現実と中国

東京外国語大学助教授

中嶋嶺雄氏

C 古代における美術の交流

——トルコを中心に——

東京大学助手 青柳正規氏

武蔵野美術大学講師 道明三保子氏

D アジアの経済開発と日本の協力

成蹊大学教授 広野良吉氏

〈ゲスト講演〉

I アジアをみる眼

東京大学助教授 小堀 巖氏



相互理解と友情を深めた国際学生セミナー

II 最近における

外国人の見た日本人観

アジア経済研究所会長

小倉武一氏

〈運営委員〉

早稲田大学外事課長

山代昌希氏

東京大学学生課長補佐

宮川 清氏

津田塾大学講師 江尻美穂子氏

立教大学講師 平木典子氏

早稲田奉仕園総主事

布施瀧雄氏

〈参加学生〉

六八名(うち女子一八名)

a 国籍別

日本(五〇)、韓国(五)、中国

(三)、タイ(三)、アメリカ(二)、

朝鮮、香港、ニュージーランド、

オーストラリア、ブラジル各一名

b 大学別

上智大(七)、早大(七)、東教大

(六)、東大(五)、琉球大(五)、津

田塾大(五)、慶大(四)、一橋大

(三)、ICU(三)、明学大(三)、

東外大(二)、成蹊大(二)、中央大

(二)、立大(二)、東学大、東工大

農工大、水産大、大阪大、大阪外

語大、都立大、専修大、日大、日女

大、武工大、共立女子短大各一名

今回のセミナーは、前回と同主題のもとに、最近の流動的な国際情勢を反映し「新しい国際環境のなかで」という副題で行なわれた。とくに中国の国際機構への参加、日中・米中接近、ベトナムと平等がアジアに与えた影響は、日本人が考える以上に複雑であり、また日本が対外政策を再検討する努力を怠るならば、アジアで孤立する可能性のあることが指摘された。

この企画は、日本万国博覧会記念協会の援助の下にJAFSA(外国人留学生問題研究会)の協力を得て、アジア研究に造詣の深い先生方が指導を担当された。沖縄県の復帰に当たり琉球大学からも五名の学生の参加を求め、一方、東南アジア以外にオーストラリア、アメリカ、ブラジルからの留学生も加わる多彩な構成のもとに、プログラムには日野自動車工業、山田繊維工業の見学などを加え、国際セミナーらしい一コマもあった。このセミナーの成果として参加者有志によりA S Sなどの研究グループが活動を継続していることも、ここに報告してきた。

国際学生セミナーの成果と期待

成蹊大学教授 広野 良吉

明治維新以来、日本はその工業

化過程で近代化即西欧化と考え、欧米の思想、芸術、文化、政治制度等を取り入れるのに懸命であった。そして何時の間にか尊欧米脱亜意識が生まれ、少なくとも戦前、戦中教育を受けた世代の日本人の中にはアジア蔑視思想態度が強く植え付けられる結果となった。

私達は、若人を中心に「アジアの平和と開発」を中心課題とした論議を重ね、そしてそれを他のアジア諸国からの留学生と一緒に考えることによって、アジアの問題は即日本の問題であり、決して彼岸の問題ではないことを十分認識し、アジア蔑視思想態度は自己蔑視思想態度につながることを身をもって自覚せんことを期待しているわけである。

国際学生セミナーに参加した人が、単にアジアについて知識を豊富にしたり、他のアジア諸国からの留学生の間に友人を得ることだけでなく、自分達の兄弟や父母、祖父母の多くがもっているアジア蔑視思想態度が如何に間違ったものであるかを認識し、それを棄て去るよう努力すると共に、自分自身もいづれの国民に対しても、いづれの文化に対しても、そして究極的にはいづれの人間に対して

も、優越感であれ、かかる差別意識を持たざる思想態度を身につけて、アジア人の一員としての、さらに世界市民の一員としての日本人として常に行動せんことを期待しているわけである。

私は昭和二六年、沖縄コザ市で生まれて以来、高校を卒業するまで一八年の年月を過ごしました。コザ市は周知の通り「基地の街」で白人、黒人が大勢おり、その中で私は育ったものですから黒人を白人から差別する感情は少しも生じなかったと言えます。けれども東南アジアなどの開発途上国の人に対しては悲しいことに、少なくとも一ヵ月前までは一人の蔑視者としての感情を時として私は持つことがあったことを否認できません。これは多分、彼らとの話し合いの場を持たなかったことに大きな原因があるとわかりました。

参加学生の感想

桑江 良昇

私は含む日本人学生と留学生がごく家族的雰囲気の中で相互に率直に意見を出し合い、相互理解を深めるにつれ、私の心に宿っていた「蔑視者としての感情」はいつのまにか消えてなくなりました。最後に私はセミナーを通して多くの学生を知り、そのうち二、三人とは文通でもって意見交換を続けています。こうしたDISCUSSION FRIENDSを得ることができたのも、セミナーの大きな収穫の一つです。私はこのセミナーへの応募理由として「広い視野をもつ国際的日本人に少しでもなりたい」と書きましたが、この希望がわずかではあるが満たされたような気がします。

(大阪大学工学部三年)

米国ベル研究所にて

江 沢 洋

二月三日付のお手紙と創立十周年記念グラフ、記念式の写真などがありとうございました。私も研究会にセミナーにとセミナー・ハウスを利用していただいた日のことをあれこれ思い返しています。とくに Inter-University で

あった「自然界における対称性」の共同セミナーはよい経験になりました。

ニュースを拝見しますと七月の「偶然を考える」のセミナーも盛況であった様子、この種のセミナーがますますさかんになるよう願っています。——自分お手伝いできなくて申しわけありませんが、日本人は働きすぎると首相が演

説したというような記事がこちらの新聞にまで出ます。この研究所にいる日本人たちの意見では、

日米の Basic な (たとえは資本) 蓄積の差があまりにも明らかな現状では、日本人はなお働き続けねばならないということ。研究条件といわず、住宅事情といっても日本の貧乏は明らかなのに、いま働きすぎを云々するのは、われわれには現状で我慢せよという号

エベレストより七周年を祝う

松崎 義徳

一寸動くと思が苦しい。シェルパと二人、エベレストが真正面に見えるカラパタルに登り着いて寒さでふるえながらこの絵を描きました。一二月厳寒のエベレストの姿です。スゴイ雪煙が吹き上げています。四人のポーター、一人のシェルパと一緒にネパールの首都カトマンズを出て、一九日です。セミナー・ハウス七周年を心から祝します。そして今後ともセミナー・ハウスは私の心の中から消えることはないでしょう。

(U研究室 セミナー・ハウス設計者)



海外だより

October 18, 1972

Dear Mr. Iida

I am honored by your invitation to speak at the seventh anniversary of the founding of the Inter-University Seminar House on November 18. I am afraid however that this will be impossible for me. The newspaper account that I shall come to Japan in November is correct, but unfortunately it is on such a tight schedule that it would be out of the question for me to attempt to include a visit to Hachioji.

I am still eager to visit the Inter-University Seminar House and see your work there, but I am afraid that I cannot do so this time.

My wife joins me in sending our first personal wishes.

Sincerely,
Edwin O. Reischauer

令に聞こえて仕方がありません。

今朝の新聞には二、五〇〇万ドルの図書館がニューヨーク大学に献堂されたことが報ぜられていました。そしてそのうち二、二〇〇万ドルは製薬会社の社長の寄付だそう。プリンストン大学の物理教室の建物にも寄付者の Plaque があります。

こちらで日本人が集まるとこんな話ばかりしています。そういう人たちと日本の Policy Makers をつき合わせたようなセミナーをこちらで開いたらおもしろいだろうと思ったりします。

(学習院大学助教授)

ウッドブルク

大学の生活 (1)

飯田 能子

ロンドンの Friends International Center での一日間の生活を終り、九月三〇日に大学のあるバーミンガムに到着し、大学生活に入りました。私の宿舎は本館の Top West と呼ばれ三階です。部屋は一人ずつです。

日曜日に Selby Oak College の共通の礼拝があり行ってみました。全部で四十数カ国の学生がいるのですが、私たちのウッドブルク大学だけでも一八カ国の学生が集まっています。

今学期(九月三〇日—十二月一日)のメンバーの中で、英語が一番話せないのは私のように少し心配でしたが、昨日英語のテス

トがあり、AからDのクラス分けを行なったら、上から二番目のクラスに入ることができました。この英語のクラスは Selby Oak 共通の授業で、外国人がとっているもの。こんなわけで講義をうけるのは大変な苦勞です。もっと大変なのは discussion group で、学生たちがそれぞれのなまりで話すのでまったくお手上げです。

◇ ◇ ◇

こちらにいて感じることは日本は非常に閉ざされた社会だということです。国際的な交流はどんなに努力してもしすぎることはないと思います。日本はあまりに極東であるだけに、日本自身が努力しなければ世界はそれほど熱心には見てくれないでしょう。あの小さな島国が異常に密集して、公害を出しながら、あくせくしているという想像しただけで、大変無気味なわけです。こちらの人々は経済成長の面では豊かではないけれど、長い歴史で培われた生活のゆとりを維持しつつ楽しんでいられるような印象を受けます。

ウッドブルクでは、木曜日の夜は International Forum といつて各国の人が公開で講演をします。

英国の世論形成の方法は、こうした集会やサロンを中心にして行なわれます。こうした場所では、タンザニア、バキスタン、オランダなどのまちなちな種の集まりが全然不思議に思われません。

(在英 大学セミナー・ハウス職員)

大学セミナー・ハウス 刊行物案内

昭和45年度～47年度

◎大学セミナー・ハウスではその活動について、次のような刊行物を作成し、利用者をはじめ関係の方々の参考に供していただきます。
◎ご希望の向きは、当ハウス企画室にご相談ください。

◎大学セミナー・ハウスで
はその活動に
ついて、次の
ような刊行物
を作成し、利
用者はじめ関
係の方々の参
考に供してい
ます。

●第二回国際学生セミナー報告書
昭和48年1月・A5・45ページ

●第一回大学教員懇談会記録
『日本における大学改革の反省と展望』
—フェドール・ジベート、井門富二夫、芳賀徹、慶伊富長、石井紫郎他
昭和46年2月・B5・76ページ

●第二回大学教員懇談会記録
『大学改革の反省と展望』
—松田智雄、西田亀久夫他
昭和46年3月・B5・111ページ

●第三回大学教員懇談会記録
『大学改革の反省と展望』
—天城勲、柿内賢信、小塚新一郎他
昭和46年9月・B5・91ページ

●第四回大学教員懇談会記録
『大学入試改革の現状・大学改革の現状』
—小川芳男、鈴木貞三、加藤六美、飯島宗一他
昭和47年1月・B5・136ページ

●第五回大学教員懇談会記録
『大学における外国語教育について』
—朱牟田夏雄、坪井忠二他
昭和47年3月・B5・79ページ

●第六回大学教員懇談会記録
『大学設置基準と大学交流について』
—木田宏、鶴戸口英善、伊藤富雄、沢田允、清水長三他
昭和48年1月・B5・112ページ

●第七回大学教員懇談会記録
『共通利用講義について』
—岩村忍、渡辺格、目黒謙次

●大学セミナー・ハウスの
創立十周年・開館七周年
記念グラフ
昭和47年11月・B5・30ページ

●大学セミナー・ハウスの
成り立ちとその歩み
—川田侃(文部時報一四九五号
所載) 昭和48年3月

●昭和45年度
大学共同セミナー年報
昭和46年3月・B5・64ページ

●昭和46年度
大学共同セミナー年報
昭和47年3月・B5・24ページ

●昭和47年度
大学共同セミナー年報
昭和48年3月・B5・61ページ

寄付金報告

昭和47年12月～昭和48年2月
ご支援を感謝して拝受いたしました。

【一般寄付者芳名】

- 二〇,〇〇〇円 教師館利用者一同 殿
- 二,〇〇〇円 上智・成蹊大学 宇野ゼミ 殿
- 一,〇〇〇円 東京大学 川西進 殿
- 三,〇〇〇円 東京都立大学 唄孝一 殿

一郎他

昭和48年3月・B5・76ページ

【特別寄付者芳名】

- 一,〇〇〇円 滝野川教会 西田 保 殿
- 二,〇〇〇円 国士館大学 亀山 潔 殿
- 一〇〇,〇〇〇円 マンダム(株) 知場権吉 殿
- 一,五一〇円 青山学院大学 鶴川ゼミ 殿
- 一,〇〇〇円 青山学院大学 原 豊 殿
- 五,〇〇〇円 東映生田スタジオ 伊藤隆造 殿
- 五,〇〇〇円 日本産業心理劇協会 小川定時 殿
- 四,三二〇円 第54回大学共同セミナー(図書購入基金) 多摩生協理事長 明治大学 中村幸安 殿
- 五,〇〇〇円 住友情報処理研修センター ヒマラヤ杉苗五本 東山荘国際青少年センター 高倉正治 殿

◆寄贈図書(昭和47年8月～昭和48年2月)

- 『京都大学七十年史』 『東京医科大学五十年史』 土方 保 殿
- 『国際問題』 一四七～一五〇 日本国際問題研究所 殿
- 『Eaters』 三三・三四 エン石油会社広報部 殿
- 『税法用語小辞典』 『税法の基本問題』 北野弘久 殿
- 『世界の名著』 八・三二 中央公論社 殿
- 『参加と抵抗』 宮田光雄 殿
- 『ピラミッドから網の国へ』 『アニマルから人間』 『巨大なる過ち』 『告示録』 吉阪隆正 殿
- 『神』の中の日本人 弘文堂 殿
- 『農業経済学序説』 『現代地方財政論』 『社会学概論』 他二四冊 時潮社 殿
- 『研究論叢』 九 工学院大学図書館 殿
- 『Asian Culture』 11 エネスコ・アジア文化センター 殿
- 『哲学総論』 一～四 下田 弘 殿
- 『フアウスト』 小塩 節 殿
- 『キリスト教の展開』 石原 謙 殿
- 『日本人の再発見』 弘文堂 殿
- 『歴史の研究』 二五 佐藤喜一郎 殿
- 『精神科学』 二(一) 瀬在良男 殿
- 『旺文社文庫四〇巻』 他二八冊 旺文社 殿
- 『建築構造計算入門』 松井源吾 殿
- 『町田市史料集』 町田市役所 殿
- 『詩と信と実存』 長沢順治 殿
- 『ウェーバーと近代』 『ウェーバー紀行』 安藤英治 殿
- 『社会学論叢』 『学叢』 『厚生ジャーナル』 笠原正成 殿

業務通信

開館当時に比べると周囲の景観は、宅地造成および構内整備等のため随分と変った。このため野鳥類もメッキリ減り、淋しい。それ故に驚など、まだ残っている小鳥の声が貴重なものに感ぜられる。47年度の利用延人員は、各位のご助力により目標の四万人を達成できたばかりでなく、年間の宿泊延人員の最高を記録した前年度をさらに上回る実績となり、この四月には開館以来の宿泊延人員二五万人を突破することになる。

昭和47年度利用状況

Table with 5 columns: 区分, 宿泊延人員・率, セミナー回数・率, 1団体平均実人員. Includes a sub-table for 区分.



東京女子大学学生課長

鈴木 法子

道徳科学研究所 新生活運動協会

Table with 6 columns: 順位, 校名, 利用回数, 順位, 校名, 宿泊延人員. Lists various universities and their utilization statistics.

- List of names and affiliations: 太平洋放送協会, 日本女子大学助教, 鶴見大学助教, etc.

- Large list of names and affiliations, including: 千葉工業大学助教, 慶応義塾大学助教, 慶応義塾大学助教, etc.

東京家政大学
東京家政学院大学
大妻女子大学

昭和四七年度に新しく会員校となられた前掲の三女子大学のために、おそまきながら歓迎の意味をかねて、当セミナー・ハウスの経営内容、事業目的、将来計画、ことに会員校三九校の年間利用状況を報告して、どのように各会員校が教育計画の中でセミナー・ハウスを重視し、活用し、そして共同の目的に参加しているかその実状を知ってもらうために懇談会を開催した。

出席者は、加藤理事長の他に東京教育大学宮島学長、東京外国語大学鐘ヶ江学長、上智大学

三女子大学の入会を歓迎して懇談会を開催する

期日 昭和48年2月6日
場所 国立教育会館

守屋学長、東京慈恵会医科大学樋口学長、武蔵大学正田学長などがお顔を見せられ、新入会員校を歓迎された。

新会員校からは関口東京家政大学学長、有光東京家政学院大学学長、大妻女子大学からは望月学生部長など二三名が出席され、総計約五〇名と盛況であった。

迎える側からも入会された側からも多くの希望や感想が述べられ、会場には国立と私立の両方から出席され、いかにもセミナー・ハウスらしくなごやかに会員校意識を深くすることができた。

- | | | | |
|---------------|-------|------------|-------|
| 成蹊大学助教 | 太田 七郎 | 西武建設(株) | 川手 正章 |
| 東京都立大学助教 | 石川 稔 | 法政大学教授 | 今井 則義 |
| 慶応義塾大学助教 | 小林 靖二 | 東京都立大学教授 | 伊藤 文人 |
| 松下電器(株) | 山岸 健 | 東京学芸大学講師 | 宮腰 賢 |
| 東京都立大学教授 | 前田 一也 | 早稲田大学生産研 | 中根甚一郎 |
| 東京学芸大学教授 | 清水 誠 | アイデアルシステムズ | |
| 日本女子大学附属高等学校 | 荒川 勇 | 西武建設(株) | |
| 文部省大学学術局技術教育課 | 小林 六郎 | 明治学院大学教授 | 神保 信一 |
| 東京神学大学 | 佐藤 敏夫 | 東京学芸大学助教 | 角尾 信 |
| 武蔵工業大学教授 | 広瀬 謙二 | 慶応義塾大学講師 | 野呂 影勇 |
| | | 明治大学教授 | 祖父江孝男 |
| | | 東京女子大学教授 | 栗原 福也 |

- | | |
|--------------|-------|
| 共立女子大学教授 | 青山 誠子 |
| 電気学会 | 高田 達雄 |
| 日野自動車工業(株) | 石田 邦雄 |
| 東京都立大学教授 | 高田 清朗 |
| 立教大学教授 | 水本 浩 |
| 日本大学教授 | 瀬在 良男 |
| 中央大学教授 | 菅野 芳彦 |
| 立教大学教授 | 三戸 公 |
| 東京農工大学教授 | 田崎 忠良 |
| 日本基督教団南三鷹教会 | 伊勢田耀子 |
| 津田塾大学教授 | 岡本 清 |
| 一橋大学教授 | 瀬在 良男 |
| 日本大学教授 | |
| 日本英語教育改善懇談会 | |
| 中央大学教授 | 小川 芳男 |
| 電気通信大学助手 | 横井 芳弘 |
| 日本女子経済短大 | 坂本 和義 |
| 青山学院高等部 | 原 純子 |
| 東京都立大学教授 | 宇佐見邦輔 |
| 東京都立大学教授 | 千葉 正士 |
| 東京都立大学教授 | 近藤 正春 |
| 早稲田大学教授 | 関口 晃 |
| 一橋大学助教 | 横山 宏 |
| 東京経済大学講師 | 田内 幸一 |
| 法政大学教授 | 島袋 嘉昌 |
| 東京大学助教 | 杉山 茂雄 |
| 立教大学助教 | 小堀 巖 |
| 明治学院大学教授 | 牛窪 浩 |
| 日本女子大学教授 | 神保 信一 |
| 成蹊大学助教 | 岡本 栄一 |
| 日産サニー(東京販売)株 | 福田 喜三 |
| 小児療育相談センター | |
| 第51回大学共同セミナー | |
| 日本女子大学助教 | 小川 信子 |
| 山林開発研究会 | |



在泊中の学生も参加しての防火訓練

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 明治学院大学助教 | 増田 茂樹 | 立教大学助教 | 松井 倫子 |
| 第52回大学共同セミナー | | 日本女子大学教授 | 岡本 栄一 |
| 日本女子大学教授 | 遠藤 卓夫 | 東京経済大学教授 | 色川 大吉 |
| 武蔵大学助教 | 清水 誠 | 早稲田大学教授 | 矢作吉之助 |
| 東京都立工業短期大学教授 | 吉田 龍郎 | 明治学院大学教授 | 佐藤 和男 |
| 法政大学助教 | 野林 正路 | 早稲田大学教授 | 松田 正一 |
| 法政大学教授 | 三浦 徳弘 | 早稲田大学教授 | 染谷恭次郎 |
| 東京都立大学教授 | 飯塚 鉄雄 | 東京都立大学教授 | 倉沢 進 |
| 一橋大学教授 | 鳴 良粥 | 明治学院大学教授 | 神保 信一 |
| 東京経済大学教授 | 荒川 幾男 | 早稲田大学講師 | 加藤 諱三 |
| 電気通信大学教授 | 河村 良吉 | 東京都立立川短期大学 | 大竹 誠 |
| | | 市光工業(株) | 須賀 進 |
| | | 明治大学教授 | 柴田 政利 |
| | | 立教大学助教 | 小谷 達男 |
| | | 早稲田大学講師 | 丸山 稔 |
| | | 早稲田大学教授 | 鈴木 英寿 |
| | | 東京都立公害局 | |
| | | 富士自動車(株) | |
| | | 第2回国際学生セミナー | |
| | | 東洋大学教授 | 磯村 英一 |
| | | 日本国際学生協会 | 上野 一磨 |
| | | 中央大学教授 | 岩尾 裕純 |
| | | 東洋大学教授 | 岡田 義道 |
| | | 一橋大学助教 | 山沢 逸平 |
| | | 東京都立大学教授 | 山本三三三 |
| | | 上智大学助教 | 磯見 辰典 |
| | | 慶応義塾大学助教 | 金子 晃 |
| | | 東京都立大学講師 | 安川 浩 |
| | | 東京工業大学教授 | 阿武 芳朗 |
| | | 独協大学助教 | 大久保貞義 |
| | | 上智大学講師 | 宇野 重昭 |
| | | 東京女子大学短期大学教授 | 川村 輝典 |
| | | 東京都立立川短期大学教授 | 吉田 勉 |
| | | 立教大学助教 | |
| | | 早稲田大学助教 | |
| | | 日本女子大学教授 | |
| | | 小川 信子 | |
| | | 東京都立立川短期大学教授 | |
| | | 立教大学助教 | |
| | | 高田 衛 | |

